

末法思想を動因とせる鎌倉時代の展開

藤 島 達 朗

鎌倉時代の出現は、解體し盡された平安末期の一展に依るものであるが、此の如き時代の展開は如何なる意味の下に説明し得らるゝであらうか。以下少しく此の問題につきての考察をまとめて見ようと思ふ。

二

保元平治の兩亂を中心とする平安末期は、藤原兼實の所謂の刑戮猥而仁義永廢れたもので、政治の無爲、綱紀の頽廢はもとより、人倫も亦全く地に墮ちて、父子兄弟相害ふの情勢を現出したのである。

この當時の社會の亂脈の甚しさは、比較的秩序の保たるべき皇城鎮座の平安京の有様を一瞥すれば、思ひ半に過ぐるものがある。既に中右記には、元永の頃⁽²⁾「凡京中、連夜強盜入人家。」と記してゐるが、平氏の擅權期より其末期に至れば、此の勢は更に甚しさを極めるのである。即玉葉に、

(3)「今夜陣中、自_二二條北_一至_三油小路西角古小屋_一、爲_三中宮廳_一、件所強盜數人亂_三入宮中_一、雜物等悉以盜了、又廳直廳守等之類、兩三人被_レ庇、又令_レ放_レ火云々、(中略)陣中強盜、古來未_レ聞、可_三彈指_一之世也。」といふが、一般民家ならまだしも警備の嚴なるべき陣中すら犯されるに至て其亂脈の如何に甚しかつたかを察し得ると思ふ。更に治承元年十二月七日の條には「凡近日、京中、夜七八所、十餘所、無_レ不_レ逢_三此災_一云々、亂代之至歟。」と記し、顯廣王記には(4)「今夜、強盜十二所云々、(中略)毎夜二三所、一夜無_レ空、天下愁歎也。」といふ。洛中強盜出沒して度なく、放火すら盛んに行はれて一般庶民の生活の保存は何處にも遂に見出し得なかつたのである。以て平安季世の京を察知し得るものがあらう。更に地方邊境に於いては豪族たる新興武士階級が漸く其威をのばし、群雄割據の狀態を形成して、争鬪攻略を事としたが、其間の無秩序に乗じて群盜流民が横行し、かくて地方民衆の生活も、こゝに全く破壊し盡されたのである。

此の上に、彼等の日常を不安ならしめたものに天變があつた。即兼實をして(5)「去今兩月之間、天變五ヶ度、皆是希代之變異也、(中略)末代之變災殃、不_レ廻_レ踵、不_レ可_レ不_レ慎云々」の言をはかしてゐるのである。

以上の如く中央地方は押しなべて其統制を失ひ、世は濁亂の巷となり天變すら人を脅やかして、時代人心の歸趨は全く失はれ、こゝに世下り我國滅亡に至るの痛切なる感慨を起さしむるに至つた

のである。即こゝに、既に久しく彼等の精神生活を支配し來つた佛教に於ける時代觀である末法到來の意識が出現するのである。

三

蓋し末法觀は、もと佛教上に於ける時代觀なる故に、其の當初の末法意識は、主として佛教界の墮落破壊に附して見られたものであつた。即扶桑略記永保元年六月十八日の條に、叡山の僧兵が三井寺に押し寄せ火を放つた慘狀を述べて、「廣考天竺震旦本朝佛法興廢、末有如此破壊（中略）」時人云、非但佛法陵遲兼又王法澆薄矣（中略）といひ、同じく九月十五日には「末時、山門僧兵、引率數百兵衆、行向三井寺、重燒殘堂舍僧房等（中略）門人上下、各皆逃隱山林或含悲入黃泉或懷愁仰蒼天今年入末法歷三十矣（中略）」となす。更に中右記の寛治元年三月卅日、六月十五日、六月廿一日の各條に山徒の暴狀を記し「末代佛法破壊歟」と述べてゐるが如きこれである。

併し末代末法に於いて、衰廢破滅の狀を呈したものは、たゞに佛法のみではなかつたので、次々に總てのものを破壊し去つた末期の世相は、遂に末法觀の範圍をより廣く、より深刻なものたらしめたのである。即玉葉に「近日、京中物取今重倍增、□塵之物不能持出途中、京中之萬人、於今者一切不能存命、義仲院御領以下併押領、日々倍增、凡縑素貴賤無不拭淚、所憑只賴朝之上落云々、彼賢愚又暗以難知、我朝滅亡其時已至歟、法皇敢不知國家之亂亡、近日被始大造作

院中上下歎息之外無_レ他事_一歟、誠佛法王法滅盡之秋也。」等といふ如く、佛教界にながめられた末法觀は、それに相應しい時代社會の相につれて、遂に義仲の亂暴等の如き政治的現象の上にもなげられるに至つたのである。以下少しく藤原兼實の日乘玉葉に依り、末期の末法意識を述べて見よう。

先づ安元三年四月十日の條に、山徒の下向に依り後白河法皇が恐れをなして倉皇皇居を棄て、法住寺に行幸あつた事を述べ、縦ひ夷狄謀叛するとも天子の皇居を去る事があらうか、彈指すべき世なるかなど歎じて、後曰「佛法王法滅盡期至歟、五濁之世、天魔得_レ其力_一、是世之理運也、惣非_レ言語之所_レ及、非_レ筆端之可_レ盡、夢歟非夢歟、言而有_レ餘、歎而無_レ益、不_レ能_レ左右_一云々。」と。山門の道場は、僧兵の集團と化して其暴狀は言語に絶し、佛法の眞髓は飛び去つて跡方なく、王法も亦無に歸して皇威の尊嚴は地を拂ふ、眞に之れ五濁末世である。更に治承四年十二月に至ては、南都の法叢が平重衡に燒却せられて、こゝにも法滅の相を現出するのである。即『廿九日、丁未天晴、巳刻人告云、重衡朝臣征_レ伐南都_一、只今歸洛云々、又人云、興福寺、東大寺已下、堂宇房舍拂_レ地燒失、(中略)七大寺以下悉爲_レ灰燼_一之條、爲_レ世爲_レ民、佛法王法滅盡了歟、凡非_レ言語之所_レ及、非_レ筆端之可_レ記。」といひ、明月記の同日の條にも此事を記して後、可_レ彈指_一云々と慷慨してゐる。

しかも世は諸源蜂起して、源平の争覇はいよゝたけなはなる時である。木曾義仲入京し、平氏を追つて洛中に暴威を振ひ、世は擧げて戰雲深きに拘らず、後白河法皇は心なきものゝ如く大造作

を始め給ふ。誠佛法王法滅盡之秋である。(前出参照)

義仲が旭將軍の威を示して六十日、早くも粟津の露と消へ、平氏を西海に追つた凱旋將軍義經も亦堀河の夜嵐の下に遂に、奥州に奔らされる。無常迅速、變轉極りない世相には、兼實ならずども⁽⁷⁾五濁惡世、鬪諍堅固之世、如_レ此之亂逆繼_レ踵而不_レ絶、可_レ悲々々。」と述懐せざるを得ない。⁽⁸⁾「三界無安之金言、誠哉此言。」三界安く無く、末法千年五濁惡世鬪諍さかりなりの佛陀の豫言は、此の如くにして彼等に眞實の相を展開したのである。

文華燦然たりし青丹よし寧樂の都の隆昌と、仁慈の君、民をしろしめした延喜天曆の聖代を偲ふ時、當代人が、世下れり末法末世なりと思惟するのも亦當然の事であつたであらう。

蓋し從來末法意識が、其の源起する所の佛教界であつた事と、其の影響のあまりに宗教界に華々しかつた事に依り、單に佛教界にのみ於ける一思潮なるかの如く思考されて來たが、此事は、平安末期を徹視する事に依つて訂正されねばならぬ。而してこの事を示すものとして當時の識者たる諸公卿の日記、記録が提出せられる。此の如くにして末法意識は、廣く當代一般の根底を流れた社會的心理であつたのである。即平安末期は、行く所迄行き、解體される所迄解體されて、こゝに當代人はまぎ／＼と彼等の時代と社會の醜にして惡なる事を發見して慨歎時を久しくした。この時代の眞相の把握こそ、當時の行きつまりを打開する唯一の鍵であつたのである。即以下社會心理として

の末法意識を検討して、次代を生むに至つた時代開展の相を跡づけ様と思ふ。

四

元來この末法思想を含む三時の思想と、これに伴ふ五の五百年所謂解脫、禪定、多聞、造寺、闢諍の五堅固とは、要するに佛を去る事遠きに從ひ、教法次第に衰へ行者の機根も悪くなり、遂に白法隱没するに至るといふ一種豫言的な佛教の時代觀であるが、一考する迄もなく至つて簡單な思想である。勿論これには警告的な教誡としての意味を認めねばなるまいが、それにしても釋尊の滅後次第に其教法衰へ、時代人心も惡化して行くといふ見方は、如何にも悲觀的な、又如何にも常套的なものである。又時代の下つた後世に於いて考へられる末法思想は、即現在を末法とし、時代を上るに從つて像法、正法と、よりよい時代を考へるもので、畢竟我等の時代觀、歴史觀として最も原始的な又最も一般的であると同時に基本的な強さをもつ、「尙古」とか、「懷古」とかに對する、現在蔑視の一佛教的表現の下に置かれたにすぎないものゝ如く思考されるのである。では、しかく簡單な思想が如何な事情の下に、以下述べる如き、鎌倉時代を開く原動力となり得るに至つたであらうか。一言にして言ひ得る。時代を形成し、時代を動かす一般民衆の共通な社會心理となり得たが故である。

蓋し佛教が、當時の社會生活、精神生活の指導的地位を保つてゐた事は、宗教界を離れた中央朝

廷の諸儀式に、佛教的なものが其大部分を占める事に依り、更に當時の一般的なる識者の記録、日記等の記事に依り、充分窺ひ得られて一々の例證を待つ迄もない事である。既に我國に於ける佛教は天平の帝聖武天皇に依て、國家的宗教となつて以來、佛教文化は社會人心を風靡し盡し、中世末期に至る迄の長い間其嚴然たる權威は保たれてゐた。佛教こそは彼等の物質精神兩生活の方面を示す指導精神であつたのである。此の如き状態の下に始めて、平安末期に至り佛教亡ぶといふも、單に外來宗教が亡ぶにすぎないのに、中右記、玉葉、明月記等の諸著者が「佛法王法破滅可_レ悲可_レ悲」ど、身も世もなく慨かざるを得ぬ事情を了知し得るのである。彼等にあつては、佛法は單なる佛法でなく、それは直に王法と結びつく。而して結びついた佛法王法は、直に當時の我國文化全體を、更に國家そのものを表出するのである。佛法の破滅は、王法の破滅であり、王法の亡滅は、直に佛教の亡滅である。而してこれらの破滅は、彼等の物質精神兩生活の破滅であり、社會の破滅であり國土の破滅である。悲しまざるを得ぬ所以である。

此の如く佛教は、彼等の生活に於いて殆んど無上命令的な權威を振つたが、如上の根底に立つ末法觀も、直接に其時代に何ら其傾向を示す實動がなかつたならば、それは單に佛典上の一訓に止まつたであらう。しかも平安末期から鎌倉初頭にかけて時代相は、既述の如く中央と地方を言はず紊亂の極に達し、道德は地に墮ち、社會は統制を失つて、彼等の生活を安固たらしむるものはなかつ

た。既に平安中期、佛教界で「入末法」を叫ばれてより、佛教界の墮落紊亂に依り、漸く一般民衆をして其の眞實なる事に思ひを至らせて以來、次第に前途の暗澹を思はしめたが、刻々に展開し出される時代相は、遂に不安な期待を末法觀にかけざるを得ざらしめた。僧徒の破戒無慚は言ふ迄もなく、教法の發動地、鎮護國家の最高道場として、一世の尊崇を集めた北嶺延曆寺は、徒に武を競ふ僧兵の巢窟と化し、山門と並んで教界を率ひた寺門園城寺は、永保年中再度の破壊に遇ひ、更に聖武帝の天平の古へより、幾世久しく尊容を傳へ給らんと思はれた盧舍那佛と東大寺は前述の如く平重衡の爲はかなくも炎上したのである。(此二項前出参照) 佛法の名實共なる滅亡と思惟するのも偶然ではない。

一方世は保元以來、慈鎮の所謂⁽⁹⁾「日本國の亂逆」に陥り、戦は絶間なく、父子兄弟相殺し、昨日の將軍は今日既に追はるゝもの、無常極りなく五濁惡世の鬪諍は此上もない。佛陀の金言は盡く彼等の中したのである。

又更に⁽¹⁰⁾「この世の變り目の繼目」の種々な事相も、彼等の思想的指導の地位にある佛陀の豫言がなかつたならば、或る程度の感懷は與へたにしても、決して右の如く強大なものではなかつたに違ひない。即彼等の信條としての此の豫言と、それに相應しい時代相とは、こゝに合して一種底力ある思潮の大うねりを形成し、社會的心理として出現したのである。即一見平凡な末法思想が、強勢

な社會心理となり得た經過である。

五

さて以上述べた様な時代相、即社會上の現象として觀察された末法の状態が、必然的に古の聖なる像法、正法の時代を憧憬し、願求する復古的な思想を將來するのは、當然な事で論をまたぬ。試みにこれを佛教界に見るに、教界の破戒無戒を慨して、斷然立つてこれを廓清し、戒律中心主義に依て古京の六宗の眞純を實現して、古の正しき教風と純なる人間性を樹立し、以て釋尊の胸奥深く直參せんとした明恵、解脱及び其一派即覺遍、戒如、寂尊等に依る戒律主義の復古運動は即これであらう。

更に此勢の發展したものに、天台宗墮落せりとして、傳教の眞正な天台法華宗の復古を叫んで立つた日蓮あり、圓密禪戒一致の傳教の精神に基く日本佛教を、圓密禪の三宗調和の禪風に依て中興し、腐敗した教界の廓清を期した榮西等があるのである。(日本佛教中興願文)

一般的に、中世に於ける所謂上代憧憬とは、即この種の復古の一面を指すもので、時代として延喜天曆の泰平を翹望し、徒然草の「何事も古き世のみぞ慕はしき、今様は無下に卑しくこそなりゆくめれ」の精神より、華やかな當時の夢を傳ふる伊勢、源氏等の諸物語が喜ばれ、擬古文學が行はれるに至つたのも、つまり上代の表面的な美しい泰平を、現在のあまりにも深刻な時代相に勘へ得

ずして只管追慕し、そのかみの夢を追ふて、さゝやかながらも其の憧れを現前に持ち來さんとするものに外ならぬ。歌壇に於ける古今集の崇拜又然りである。

次に、この單なる憧れから出でた復古主義が、今一步内省を加へられ、更に思想的練磨を経る事に依り、そこに必然的に古に復せざるを得ざるに至るのである。即この自分を離れた單なる社會上の現象として見られた末法觀が、漸くにして內的に觀察され、直に各自の精神生活の深底に迄持ち下されて、更に力強き運動を起すに至るので、先の如く又これを宗教上に見れば、瞭然たるものがある。

先づこの運動の宗教上の發端、先驅者として、源信と其著往生要集を擧げねばならぬ。即彼は其劈頭に「夫往生極樂之教行濁世末代目足也」とて、斷然濁世末代なりてふ自覺を掲げ、末法期の破戒無慚を内部より觀察し、社會上に眺むる事なく自身の心上の末法の相を凝視し、自己の罪惡を正觀したのである。然ればそこに必然的に自己の問題としての救濟が考へられねばならぬので、他力救濟教の成立根據は正しくこゝにありと思考されるのである。少くとも自己をみつめて眞實の相を罪惡に發見し、救濟を願ふ過程を見るならば、積極的に破戒無慚これ人間性といはぬまでも、尙あさましきも我等の相の自覺は否定し得ぬ所であらう。要集開卷第一に述べる地獄、餓鬼、畜生の三惡趣の悽慘な相こそは、彼が末法の社會を語つたと同時に、末法の人間の眞相を告白したものに外

ならぬのである。

此事は法然になると著しく明瞭さを加へるので、門下の人々の肉食妻帯を或る程度迄認めたと考へられる事は、即人間の人間としての欲求を肯定し、抑し能はぬ人間性を認めしものに外ならぬ。

親鸞に至つて此情勢は極まるので、^(四)穢惡濁世群生不知^レ末代旨際^一毀^二僧尼威儀^一今時道俗思^三量^{セヨ}己分^二即ち俗人の劣惡は言ふ迄もなく、僧尼の威儀のないのを譏るものがあるが、これは末代の我等の真相を知らないもので、僧俗共に自己の本性、醜惡な人間性にめざめねばならぬと絶叫するものである。此の如くにして彼は佛教諸派中、絶へない無戒を標榜し、遂には出家たる事をも放擲するに至つたのである。赤裸々となつた人間の醜さは遂に被ひ得ない。末法五濁の凡夫であると自覺した時、眞の人間性をみつめて、人間のあるがまゝなる現實を知つた時、戒律はあまりに高く、現實を現實とし、現實の醜さに沈潜する事に依つて、自らそこに聖淨なもの、發見信受となり、これに依て現在の醜惡を純化し、よりよき方向に上昇せんとする考方、即末法の時期、眞なる人間性に即して生きんとする新な宗教が、源信を承け、法然に體系づけられ、親鸞に依て大成されたものと確信するものである。

以上の如く末法觀は、時代社會を反省せしめ、人間を反省せしめたが、其結果遂に時代社會を知らしめ、人間を知らしめたのである。末法觀は此の如くにして人間性を自覺せしめたのである。し

かも其の末法觀の過程が、日本の社會に行はれ、日本人の胸中に育まれた限り、それは日本を知らしめるものであり、日本人の自覺であらねばならぬ。卽末法觀に依る新興宗教が、人間的宗教、日本的宗教となされる根據は、こゝに置かれねばならぬと思考するのである。

さて日本として自覺、日本人のめざめとは何であらうか。眞の日本及び日本人の相の發見は、必然的に古代の外來文化の影少い眞の意味の純なる日本のすがたを追懷し、これに復らんとするもので、日本のめざめは、かくして古き日本を見出す過程であらう。併してあまりに豊饒な外來文化が末期の行きつまりの主な部分を醸成したものであるから、其打開に依る更生が、中間を逃れて純古代に復へるは又當然な事である。しかもこの復古の形式は、單なる憧れや復古せんが爲の復古ではない。自覺そのものが、必然的に古き精神に一致したに止まるのである。自覺と復古とは、眞なる意味に於いて決して離れて存在する思想ではない。併し彼等の自覺に於ける彼等と、客觀的な古きすがたが等しく一致するとは考へられないが、そこに何らの矛盾なく思想的開展の行はれ得るのは、即彼等が自覺に於ける彼等の相そのものを、古代に見出すに外ならぬからである。復古せんとするすがたは、その儘現在に於ける彼等の自覺相の投影に外ならぬのである。

鎌倉時代文化の主流をなすものは、武士の文化である。今こゝにそれにつきて論ずる暇は持たぬが、一體武士の精神及び武士文化の内容は、至つて簡單直截なものである。しかく簡單な彼等に、

上來述べた様な思想的に深い人間性のめざめ、及び日本人の自覺等の存するとは考へられない様であるが、彼等は概して僻遠の地にあつたが故に、中央輸入文化にふれる事少く、自覺として時代が辿りついた古き日本の相を失ふ事少くして傳承し得たのである。

彼等の質朴、剛毅、實力的にして殺伐なる、事に當つて實際的にして効果的なる、總ては中央文化的素養を受けたものゝ漸く失つた人間性の素純なる相の要件たらぬはない。これこそ人間本然のすがたである。彼等武人は、その儘にして先の自覺の具現者であり、權化であつたのである。こゝ至つて末法的思潮の源泉は、武士の興起にあり、其の流行は、武士活躍の準備行動に外ならなかつた事を知るのである。復古に依て平安末期が同生の爲發見し、要請したものは、純なる人間性の持主としての武人のすがたであつたのである。而してこゝに武士の精神及び文化が、直に其相の具現者として、何ら平安末期が辿つた思想的過程を経る事なく、精神史、文化史の上に出づる事を許されるのは、日本精神及び文化の發展の段階として見た時、それらが成長發展して遂に武士の精神及び文化に到達したものであるが故に、實質的にはしかく單純な武士の精神及び文化も、思想的歸結として見て、其れ迄流轉して來た日本精神及び文化の内容を、その儘内容とせしめられるものと考へねばならぬと思ふ。

即彼等の政治上に於ける封建制度は、期せずして古代の氏族制度の精神に一致する。彼等の行動

の規範であつた北條泰時の所謂⁽¹¹⁾「だうり」そのものは、平安時代に見られぬ古代の素直なる人間性本然のひゞきに外ならぬ。

以上の如き思潮の澎湃として漲る所、宗教上に新佛敎の興起、神道説の大成となり、文學上に漢文の日本化した和漢混淆文が成就され、更に徹底して、⁽¹²⁾慈鎮の國語使用の提唱となり、武人を語る戦記文學を生み、「だうり」を示す敎訓文學を齎す事となつたのである。歌壇に於ける萬葉集の出現も亦古日本を求むるものゝあらはれを示すものであらう。しかもその大立者に、武人たる源實朝を見出す事に吾人の興味は盡きぬ。美術上にて、繪畫に於ける人間的、寫實的な肖像畫、更に日本的な繪卷物の隆盛を來し、彫刻界に於ては、天平の雄健な手法を復生した運慶一派に依り、素朴にして内心の緊迫を告げる力強いリアリスチックな刀法の完成を成就したのである。

更に一般的に、國家として、武人頼朝が⁽¹³⁾「我朝神國也」と叫んだ事は、當代神國日本發見の第一聲であらねばならぬ。

六

上來概略ながら、平安末期から鎌倉への時代的展開の相を述べ得たと信ずるが、現今に於いて、我等のもつ宗教、藝術、道德更には衣食住の様式に至る迄のあらゆる新日本の文化の萌芽を、鎌倉文化に求めねばならぬ以上、鎌倉文化を生み出すべき、思想的開展をあらはした平安末期の末法思

想の我國文化史上に於ける重大なる意義を認めねばならぬと思ふものである。

註

- 1、玉葉 治承四年九月三日條
- 2、中右記 元永二年二月廿日條
- 3、玉葉 安元三年五月一日條
- 4、顯廣王記 治承二年八月五日條
- 5、玉葉 安元三年七月十二日條
- 6、玉葉 壽永二年九月五日條
- 7、玉葉 文治元年十一月七日條
- 8、玉葉 壽永二年八月六日條
- 9、愚管抄
- 10、教行信證 化身土卷
- 11、北條泰時が貞永式目の發布に際し同重時に貞永元年九月十一日付を以て送付した書翰中
- 12、愚管抄
- 13、吾妻鏡 壽永三年二月廿五日條